

# やまと 民俗への招待

つられているというの  
が一般的だが、樹木が  
群がり生える森を聖地  
としてまつられている  
神が森神（モリガミ）  
である。

奈良市の大保（おほほ）  
の集落では、秋祭  
りの朝、御幣の束を手  
にした神主役の長老  
が「あおいばのモリ、  
はなのようとめ」と唱  
えると、周囲のお渡り  
衆が「ちわやーふ、ち  
わやーふ」と続ける。

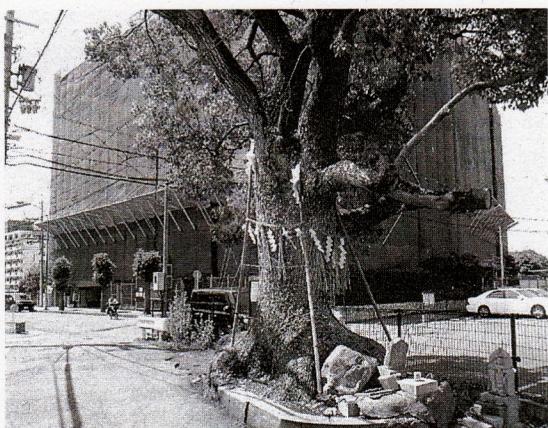
こうして次々に21の小  
さな神々を呼び寄せる  
「モリガミ呼び」をして  
から、大保の祭りは

今日、神は社殿にま  
つられていないというの  
が一般的だが、樹木が  
群がり生える森を聖地  
としてまつられている  
神が森神（モリガミ）  
である。

奈良市の大保（おほほ）  
の集落では、秋祭  
りの朝、御幣の束を手  
にした神主役の長老  
が「あおいばのモリ、  
はなのようとめ」と唱  
えると、周囲のお渡り  
衆が「ちわやーふ、ち  
わやーふ」と続ける。

今木義法さんの『生  
駒谷の七森信仰』によ  
ると、生駒市内には、  
モリ七つをセットにし  
てまつる「七モリ」が  
広く残っており、モリ  
の木は切ってはならな  
いとされ、雨乞いや力  
ンジョウ掛け（綱掛け）  
の対象であったり、元  
服祝いの時に参ったり  
する（秋原）。モリの  
神はミーサン（蛇）だ  
とも言われる（藤尾  
仁田）。

## 今に生きる野の神



豊作を願い、クスノキの巨木に巻き付けられたしめ縄。都市化が進む地域でも野神行事が伝えられている=奈良市芝辻町3で

場合がある。百姓の神  
さんとされ、ヨノミ  
(榎)の木が御神体  
となっていることが多い。  
木が一本生えてい  
るだけで、「一本木さ  
ん」と呼ばれることが  
ある。

ノガミはミーサンで  
あるとされ、藁でジャ  
(蛇)綱を作つて担ぎ  
回つてからノガミの木  
に巻き付けたり、牛馬  
の絵馬を奉納したりす  
る。このノガミもモリ  
ガミの一種である。農

耕が本格的に始まる前  
には、野を支配する神  
を今も丁重にまつらな  
ければならない。

清少納言は「森は、  
浮田の森。うへ木の森。  
岩瀬の森。たちぎきの  
森」と森の名を挙げ、  
森と森の名を挙げ、  
木が一本しかない森を  
「ただ一本あるを、な  
にごとにつけむ」と  
いぶかしんでいる(『枕  
草子』)。今も生きて  
いるこうした小さな神  
々に満ちた世界とは、  
富仕えの女房は縁が薄  
かったのだろう。

(奈良民俗文化研究所  
代表・鹿谷勲)